子良の昇天

宮原晃一郎

青空文庫

一

むかし三保松原に伯良といふ漁夫がゐました。松原によく天人が遊びに降りてくるのを見て、或日その一人の天の羽衣を脱いであつたのをそつと隠しました。天人は天に上る飛行機の用をする羽衣をとられて、仕方なく、地上に止まつて伯良のおかみさんになりました。此天人が生んだ子は男で子良といふ名でした。

天人は天に住まうものですから、此地上にゐては外国に来てゐるやうなものでさつぱり面白くありません。間がな隙がな外に出ては空を眺めて、嘆いてをります。

「あゝ羽衣があつたら、あの雲の上、あの青い〳〵空の奥の御殿へ行かれるものを、伯良さんは何処に隠したか知ら。」

伯良の留守を見ては、天人はこつそりと家のうちを捜してみますけれど、羽衣はないのでした。

「あゝ仕方がない。もう死ぬまで漁夫の女房で暮らしていくことか。」

天人は深い〳〵嘆息を吐いてをります。

二

ところが或日のこと、自分の生んだ子の子良が来て、おつ母さんは何ぜいつもそんな不機嫌な顔をしてゐるのですか、と訊きますから、実は私はお隣りの助さんや、八さんのおかみさんとはちがつた天人であるから、故郷の天へ帰りたくてたまらないのでと言つてきかせました。

「さうかい。ぢやお母さんの故郷の天はどんなところかい。海もあるかい、山もあるかい。そして木も生えてゐるかい。魚もとれるかい。」

子良は十になつてゐましたから、もういろんなことが分るうへ、何でも珍らしいことを見たがり聞きたがりするのでした。

「そんなに一時にきいたつてお話は出来ませんよ。妾の故郷の天は一口に言へば、あのそれ、時時空に見えるでせう。美しいお城が、あれよ、あの蜃気楼といふものとよく似てゐるの。」

「ウン、それぢや、僕も行つてみたいな。おつ母さん、僕をつれて行かない、天へ遊びに。」

天人は悲しさうに頭をふりました。そして天の羽衣といふものが無ければいかれない。その羽衣は、伯良がどこかに隠してゐて、どうしても渡して呉れないから、迚もその望みをかなへることは出来ないと、言ひました。

三

それから又三日ばかり経つて、天人が空を眺めてゐますと、子良がこつそりと来て、その袖を引いて、囁きました。

「あのね、羽衣の在所が分つたよ。」

「えつ、本当かい。」

と、母の天人は眼を丸くしました。

「本当とも、けれどもね、僕には取れないところにあるんだ。」

子良は、今朝お父さんの伯良が、天井裏にある網を下すとき、小さなつゞらを、一緒におろし、その蓋をあけたら美しい着物が出て来たので、何かと訊いてみたら、之は天の羽衣といふものでお母さんがお嫁に着て来た大事なものだ。他人に知れると盗まれるから、誰にも言ってはいけないぞと、伯良が言ったのでした。

「あゝ有難い、それでは直ぐそれを着て、天に昇りませう。」

天人は大喜びで、伯良が沖に漁に出た留守を見はからひ、そのつづらの中から天の羽衣を出して、着ました。さて子良を背におぶつて、天へヒラ〳〵〳〵と昇らうとしました。ところがドツコイそんなうまいことは出来ません。如何に昇らうとしても、身体がちつとも浮かないのです。

「ハア悲しい。困つた。」

と、天人は目に涙をためて、口惜しがりました。

「子良や迚も此羽衣だけではお前までつれて昇る力がありません、お前は此地にピツタリとくつついて離れることの出来ない人間の血をうけてゐるから、なかなか重たくて迚もダメです。」

「ではおつ母さん、僕つれていかないの。どうしてもいけない？」

「ダメ〳〵、あとで、また何とかしませう。今はダメ。誰かに見付かつて、又羽衣をとられるといけないから、お母さんは直ぐ帰ります。待つておいで、左様なら、左様なら！」

天人は子良が自分を慕つて泣くのに引かされ、自分も涙を流しましたが、故郷へ帰りたい一念は押へきれず、只ひとり、ヒラリ〳〵と天をさして昇りました。

四

昨日と経ち今日と過ぎ、忽ち三四年経つてしまひました。けれども明暮子良がどんなに待つても天人の母は帰つて来ません。どうなつたものやら風の便りすらないのでした。

子良はもう立派な漁夫の少年です。親父の伯良を扶けて漁に出ます。けれども母のことばかり考へてゐました。子良の幼ない記憶に残る母は鼻の高い、色の真白な、せいの高い美しい人でした。子良はその母が目について忘れられないのでした。

「お前が天の羽衣の隠してある処を教へたりなんかするから、お母は去つちまつたんだよ。だが彼の女は遖が天の者だけに子供の可愛いことを知らんと見える、人情がないね。」

伯良は子良がぼんやりと外の松の樹の下に立つて母の飛んで行つた空を眺めてゐるのを見ると、よくこんな愚痴まじりの小言のやうなことを言ひました。

そのうちもう二年経ちました。或る日矢張松原に出て、空を眺めてゐますと、日のある方から何やら白いものが落ちて来るやうですから「ハテ何だらうか」と、瞳をこらして見てゐると、それは段々近くなつて一羽の鶴であることが分りました。するとまたその後から黒い大きなものが降りて来ますから、いよ〳〵変だと思つてゐると、それは一羽の大鷲で、鶴をめがけて、追うてくるのだと分りました。

鶴は悲しい声を出して、一生懸命に逃げて来ますが、鷲はその強い大きな翼を搏つてすさまじい勢で風をきり、たちまちに追ひ付き、

その鋭い爪と嘴とで、鶴を突いたり、蹴つたりするので、空は鶴の白い羽がとび散り、まるで雪がふるやうでした。鷲は鶴を引浚つていくつもりですが、鶴も今は必死ですから、その長い嘴を槍のやうに使ひ、その羽に力をこめてふせぎながら、隙があつたら逃げようと、だんだん下へ〳〵と舞ひ下つて来ました。

子良はそれを見て、鶴がかはいさうになりましたので、どうにかして助けてやらうと思ひ、手に小石を拾つては鷲をめがけて投げつけました。始めのうちは遠いのでなか〳〵とゞきませんでしたが、だん〳〵近くなつたので、その石の一つが、まぐれ当りに鷲のからだに当りました。さすがの鷲もそれには少し困つたところを、鶴はす早く逃げて、子良の近くにある小松のしげみに隠れてしまひました。

五

マアよい事をしたと思つて、子良は喜んで家に帰り誰にも言はずにその日も暮れましたので、寝床に入つて眠ました。

しかし二三時間も経つと、誰やら女の声で御免なさい〳〵と言つて、雨戸をたゝく者がありますから、目を醒まして明けてみますと、其処に昼間たすけてやつた鶴が立つてゐました。

「先程はどうも大変な御助けを受けまして何とも御礼の申し様もございません。」と、鶴は丁寧に頭を下げて言ひました。

「実は私は貴下のお母様から言ひつかつて、天へお迎へに来ましたが、鷲の為めにサン／〃＼羽や身体をいためられて、自分だけ低い空をとぶのがやつとでございます。ですから貴下を背負してあの高い天の御殿などにはもう迚もいかれませんけれども此儘にして置いては私の役目が果せませんから、一つ貴下が天に御昇りになれる法をお教へ致します。」

天の羽衣もなく、又鶴の背にものらずに天に昇る法といふのは斯うでした。

昔天人が降つて遊んだ松原のあたりに、月のよい夜時々天から大きな釣瓶が縄をつけて下ろされる、それは天人が風呂をたてる水を汲むのでした。

元から天人達は自分で降りて来て美しい景色を眺めながら、うしほを浴びるのでしたが、伯良が羽衣を隠してから後危ないから、こんな工合にしてゐるのでした。で、子良はその釣瓶の水をまかして、自分が代りに中に入つて行けばよいといふのでした。

六

子良は今度こそ天にのぼつて、蜃気楼の御殿を見たり、お母さんに会つたりすることが出来ると、大変悦んで、或る月のよく光つた晩、こつそり鶴が教へた処に行き、松の蔭に隠れて天から釣瓶の下りてくるのを待つてゐました。

夜もだん〳〵更けて、月が高く昇り、松に吹く風の音がさえにさえて来ますと、果して空から大きな釣瓶が下りて来て、汐の中に、ドブン、ザワ〳〵と音を立てました。子良はそら今だと大急ぎで飛び出し、その釣瓶の水をあけると、自分が代つてその中に入りまし

た。釣瓶は勢よく天へ引き上げられ、高く〳〵上がつたとき、どうした機みにかその繩がきれて、子良は真逆様に地面へ墜ち、身体は形もないほどメチヤ〳〵にこはれてしまひました。けれどもその時子良の魂だけは、フワリと浮いて、羽衣も釣瓶もなしに、ひとりでに高く〳〵天へ昇つて行きました。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　第一一巻　楠山正雄　沖野岩三郎　宮原晃一郎集」ほるぷ出版
　　1978（昭和53）年11月30日初刷発行
入力：鈴木厚司
校正：noriko saito
2004年8月13日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子良の昇天

宮原晃一郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/